

綾瀬川、ともに歩んで19年

綾瀬川を愛する会

序 東京から綾瀬川のほとりへ

「綾瀬川を愛する会」は、平成6年（1994年）に「綾瀬川清流ルネッサンス21世紀地域協議会」が設立され、「綾瀬川に言いたいことはありませんか」という意見募集があり、それに応募したことから始まりました。

昭和39年（1964年）東京に出て結婚、子育てのため自然の多かった埼玉県川口市戸塚に移り住みました。すぐ近くに伝右川、300メートルほど先に綾瀬川がありました。そこは6月になればカエルの合唱で夜も眠れないほど、ふるさとを偲ぶに十分な自然があふれていました。自然好きの私は心の底からこの地に來たことを喜びました。

高度成長が始まって

それから高度成長が始まりました。私にとってはあつという間、3人の子供が成人して「空の巣症候群」の気分になったころ、綾瀬川の土手に立ち、あらためて周りを見渡したことがありました。綾瀬川はさまざまな工場をはじめとする周囲からの排水によってヘドロがあふれ、また家庭の生ゴミの他、自転車やテレビ、冷蔵庫など大小様々の投棄物に埋まっていました。

そのとき何と汚い川か、と思いました。そこには昭和55年（1980年）ころから10年近くも日本の第一級河川における水質汚濁「ワーストワン」と呼ばれた姿がありました。河畔の森、土手はゴミ捨て場と化し、人々はゴミを運んできては焼却する場所と考えているようでした。

これはなんとかしなければ。ワーストワンと呼ばれても誰も何もしないのだろうか。巷のうわさでは、埼玉県の河川改修工事で「ハンノキ林も中洲も総て消える」ということでした。私の心に「この川の自然を守りたい」との思いがあふれました。

川口市主催の河川講演会などを聴きにいき、この「綾瀬川に言いたいことはありませんか」に応募しようと考え、自分の思いをノートに書き出しました。

① ハンノキの林は人々の憩いの場所として、また県

蝶ミドリシジミの繁殖地として残せないか、河畔林として残してほしい。

② 中州は水鳥の休み場所として必要である。

③ 土手をコンクリートで固めないで。花咲く自然の土手こそ都市の子供たちに日常の自然を体験させてあげられる唯一の場所ではないか。

④ 支流から流れ込む皮工場などの排水は、浄化して川に入れてほしい。

⑤ 私たちにできることは、家庭から化学物質（合成洗剤など）をできるだけ流さないようにすることであり、その努力はしますから……。

そして「川は心のふるさとに成りえます。いつか彩の国に誇れる川にしましょう」と訴えました。

このことで平成7年（1995年）、清流ルネッサンス21世紀地域協議会からの表彰を受けることになったのです。しかし表彰されても願いはかなわないのでは？と、とても不安でした。でも翌年から工事が始まり、中州が残されました。私は、単に一個人の応募が表彰されたというだけで埼玉県の行政が行動してくれたことに驚きました。これなら、自分たちも協力したいと、会の立ち上げに奔走しました。

「綾瀬川を愛する会」が立ち上がる

こうして、初めは数人の仲間と共に、平成8年（1996年）10月20日ついに規約を持った「綾瀬川を愛する会」が誕生しました。私たちは以下のように活動を定めました。

- （1）主流及び流入箇所の水量及び水質調査
- （2）河川改修工事の状況調査
- （3）水辺及び周辺動植物の生態調査
- （4）廃液・ゴミ投棄調査
- （5）犬の糞の処置マナー向上呼びかけ
- （6）生活排水の浄化（廃油せつけんなどの普及）
- （7）定例ゴミ拾い
- （8）行政との提携

(9) 河川愛護団体及び自然環境保護団体等との交流

(10) 綾瀬川など河川に関する調査・研究

(11) その他（会報の発行など）

自分自身本当にできるのかしらと思うような、意欲的な幅広い内容になりました。最初の数年間は、堤防と河畔のゴミ拾いで手が一杯でした。ヘドロ渦巻く水中には自転車をはじめとして、ソファ、椅子、テレビ、冷蔵庫、布団など様々な生活用品、工業用資材が投げ込まれ、悪臭の中引き上げには多大な労力を要し、それらの運搬には何台もの大型トラックが必要でした。

数年して、ゴミの少ない清潔な堤防になったせいか、ゴミの投棄が目に見えて減少しました。PH、COD、DOおよび透視度測定を中心とした毎月1回の水質調査も会の発足以来現在まで継続し、河川への廃液対策には、県や市との連携を図りました。

その中で特筆すべきひとつは、河畔林再生の運動であったと思います。



写真1 ゴミ拾い（活動をはじめた頃）

河畔林再生の運動

平成9年（1997年）5月には工事計画の説明を受け、計画地域内のすべての木々が切り払われることを知りました。この河畔林には、絶滅危惧種のナガボノアカワレモコウ、ナガボノシロワレモコウもあり直径15センチくらいのオニフスベというキノコも採取でき、また川口市では最後までいわれる稲穂を干す“ハサギ”の並木等も含まれていました。直径1メートルもあるムクノキやハンノキなど300本以上の樹木の調査をしました。そして、戸塚綾瀬小学校裏に大きな榎がありました。我々はこの榎を中心に自然林の保存を訴え行政の皆さんとの勉強会を持ち、話し合いを繰り返しました。

異常気象による洪水が各地で多発していました。3度



写真2 稲を干した“ハサギ”のための木々も総て伐採された



写真3 切られる桜とのお別れ会

目の設計図面でついに綾瀬川河畔で再生の地を得、また人々の生命と財産を守る治水工事の大切さも学び、新聞などの報道による支援も得ました。そして、河川工事に先立つ平成12年（2000年）8月3日に中川綾瀬川総合治水事務所（国）、7日に埼玉県河川課、および10日に川口市長に要望書を提出し粘り強く交渉しました。その結果、県との話し合いに折り合いをつけて、平成12年（2000年）11月末、官民共同の合意の元、河畔林の再生を含めた工事開始に漕ぎつけました。その榎を切らないだけでなく、その周辺に元々自生していた樹種の河畔での復元が約束され、綾瀬川唯一の、河畔林の再生による人工河畔林『綾瀬の森』が誕生しました。それでも、多くの木々が切られ音を立てて倒れていく様を見たときは、我が身が切られるような悲しい思いがしました。「新しい森ができたならまた会おうね」と涙を飲まずにはいられませんでした。

平成15年（2003年）3月21日、子供たちも招いて、川の浚渫工事で出た土砂で築いた新しい森の用地に、設計図面通りに苗木が移植されて、残されたエノキの大木とともに新しい森の源が形作られました。硬い土を割って、草木が目吹きだし、暫くのうちに緑で覆われていきました。



写真4 皆で新しい森作り



写真5 河畔林の再生 「綾瀬の森」の原点

次々と新しい木々が自生し、ハンノキなどはスクスクと伸びています。かつて「ネムノキの里」であった綾瀬川の土手には、再び数十本のネムノキが自生し始めました。ヤナギやクワは繁茂し、昆虫や水鳥もあふれ「綾瀬の森」と名付けられて、たぶん全国的にも珍しい再生河畔林が生まれました。それから既に10数年、この地に自生する絶滅危惧種ナガボノアカワレモコウを含む様々な植物に鳥やチョウ、甲虫類などの昆虫が集まる豊かな森に成長しました。ほそぼそと生きながらえてきたコムラサキ（タテハチョウ）が元気な姿を見せ、2014年6月初めてこの「綾瀬の森」の柳の樹冠をミズイロオナガジミ（ジジミチョウ）が飛翔しました。

暑い日の水やり、それでも枯れてしまった10数本の苗木、「綾瀬川を愛する会」の皆で行った下草刈り、雑草抜き、木々の間を渡る涼風を身体一杯に受けると、辛かったこと悲しかったこと、まるで何もなかったように心が洗われます。

さらにこれから10年もしたら、ここはどうなっているのでしょうか。かつての森の主であり、切られてしまったムクノキのモニュメントには、「大地にしっかり根を張って、伸びよ若木、明日に向かって」と私たちの思いが刻まれ、明日の子供たちへ「綾瀬川を愛した大人たちからの贈り物です」と官民共同の思いが記されています。



写真6 綾瀬の森に残った絶滅危惧種「ナガボノワレモコウ」2012.9 埼玉新聞



写真7 皆で雑草抜き（2014年8月「綾瀬の森」は既に相應の森になった）



写真8 「綾瀬の森」で木々の剪定（“日本100名山ひと筆書き”の田中陽希氏が偶然通りかかりチェーンソウの始動を手伝う）

子どもたちと一緒に

綾瀬川を愛する会は、近くの川口市立戸塚南小学校の特別授業「グングンドリーム」に呼ばれて年3回、春から秋には鳥や昆虫、植物の野外での生態観察授業、冬には教室で“生命とは何か？”という大きなテーマを掲げ、スライドを使いながら生徒と先生の問いかけと返答の生き生きとした授業を行っています。また川口市立戸塚綾瀬小学校の総合学習授業、川口市立戸塚北小学校の自然観察会など綾瀬川の生物観察を中心とした



写真9 綾瀬小学校の子どもたちが「綾瀬の森」での総合学習を文庫に！

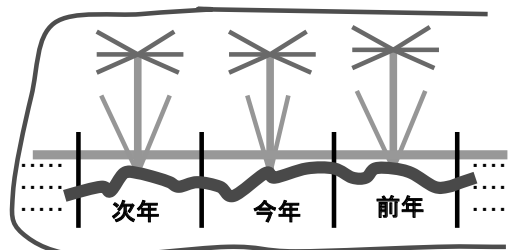


写真10 戸塚北小学校の子どもたち これから綾瀬川へ出発！

自然とふれあう授業を行ってきています。会員の横山氏は県の環境アドバイザーの資格取得とともに、独自で会員制「コロボックルクラブ」を立ち上げ、「綾瀬の森」で子どもたちの環境教育に特化した活動を行っています。このコロボックルクラブと連携し年に数回、生物調査やくるみ餅づくり、ドングリコマ回し大会など種々の活動を行うようになりました。これらは、自然と子どもが直接に結びつく場であり、様々の生物への豊かな心や思考を育てる有意義な活動と考えています。さらに綾瀬川の水質が向上してきたことから、この綾瀬川の森に直面する河川内にワンド（湾度、浅瀬の意）を造り、子どもたちが河畔だけでなく直接水中に入って魚類の観察や自然とより深く接する計画を立案し埼玉県と合意が成立しました。ワンドのための河川改修は近いうちに実施の予定です。

綾瀬川周辺（特に川口市側）に住宅が密集してきたこと、下水が未完で浄化槽普及が必要とされることなどから、数年前に綾瀬川に流れ込む支流への家庭排水マナーの向上を、綾瀬川水質向上のための重要な対応と位置づけました。日々の食器の洗浄で中性洗剤を使わず、使用後の食器をティッシュペーパーで拭き取り、その後アクリルタワシを用い水のみで洗浄します。用いたティッシュペーパーは固形の生ゴミとして出し残飯や

生命(いのち)とは？



区別はできるが、同じひとつのもの？！

写真11 対話型授業“生命とは何か？”戸塚南小学校での特別授業「グングンドリーム」で



写真12 綾瀬の森で取れたクルミでクルミ味噌作り

煮汁などを排水に混ぜない方式です。この方式は、一度覚えると大変簡便であり、排水の水質が著しく向上するので、「アクリルタワシ運動」として、綾瀬川を愛する会の現在の活動の主目的の一つとし、また浄化槽普及事業とも係わるようになりました。

綾瀬川と私たちの未来

私たちは、それぞれいろんなところから、縁あってこの綾瀬川の麓に引っ越してきて、最初は美しく自然豊かな伝右川や綾瀬川に安らぎを覚え、そのなかで家庭を営み子どもを育てました。その途中で、高度成長期がやって来て綾瀬川の周囲に工場ができ住人が増えるとともに、綾瀬川は異臭を放つゴミ置き場と化しました。しかし、綾瀬川を初めて見たときどれくらい美しかった



写真13 アクリルタワシ作り方と使い方の実習(川口市立慈林小学校)

か、どれくらい来てよかったと思ったか、その時もった気持ちを誰も忘れてはいませんでした。その気持ちが私たちのこの綾瀬川の水質浄化の運動、木々を再生させ、新しい森を作り、多様な生物を再生させようという運動の源になったのです。私たちに対応してくださった川口市や埼玉県の人達も人情にあふれています。なるべく耳を傾けようと、対応しようとそれぞれの人がそれぞれの立場で、力を尽くしてくださったことは忘れられません。感謝の気持ちで一杯です。また、ここ数年では、伝右川的环境対策を熱心に考え行動している獨協大学経営学科の米山昌幸先生のゼミやDECO (Dokkyo Environmental Cooperating Organization) の人達とも、伝右川や綾瀬川への活動を通じて知り合い、2周りも3周りも年の違う若い人達とご一緒するようにな



写真14 獨協大学の学生と一緒に(2013年 獨協大学雄飛祭にて)

りました。

今後も、人間社会の変化に伴って綾瀬川や伝右川も変化していくことは必定であり、それに伴って「綾瀬川を愛する会」も変化していくことは必定です。たとえどのように変化しようとも、その時々に応じて、一人ひとりが自分の心に向き合い真っ直ぐ見据えて、その心に正直に対応し、自分たちだけで閉じこもったり愚痴を言う合うのではなく、堂々と正面から社会に主張していきたいと思います。

綾瀬川を愛する会